

[研究ノート]

表現としての宝塚歌劇に関する考察* ～教育理念と100年の歴史～

加藤暁子**

1. はじめに

十文字学園女子大学短期大学部（以下「本学」という）で舞台芸術を学ぶ講座として『宝塚研究』（前『芸術思想研究Ⅱa』を含む）を開講して8年目となり、宝塚歌劇そのものの存在や知名度が学生の中に定着されてきたと考える。平成24年度に改変された本学文学科は、「表現文化学科」という名称に改定された。その宝塚歌劇団は世界で唯一の未婚女性のみで結成されている劇団であり、日本の文化の一端を担う芸術として発展し続け、2014年には100周年を迎える。

日本の伝統芸能である歌舞伎や能や狂言の演目は、基本的に固定された同じ演目を演じ続け、伝統を継承していくことを美学としている。それに比して宝塚歌劇の演目はほとんどが新作で、独自で作品を次々に作りだしていることは大きな特徴である。その宝塚歌劇が毎年発表している新作品の量の多さは、劇団四季をはじめとする数々のミュージカルを上演している劇団と比べても類い稀である。宝塚歌劇の新作品の演目数は、2012年だけでも芝居とショーを合わせると19種類にのぼり、それらは、その時代背景を取り入れながら常に変化してきている。それを可能にしているのは、劇団に専属で所属している大勢の演出家や舞台スタッフがいることにある。それらスタッフがそれぞれの部署で宝塚の伝統を受けつぎ、次世代を育成し続けている。これらのことで歌劇団全体が前進し続ける姿勢が基本にあるからに他ならない。

『宝塚研究』の講座で、2007年～2012年に受講生に行ったアンケート調査で、「宝塚歌劇のイメージを一言で表す言葉は何か。」という質問に対する学生（2007年～2012年の5年間の受講生 中国留学生4名を含む通算152名）の回答として圧倒的に多い語句は、「華やか」「豪華」であった。宝塚を学ぶ以前からこの言葉を連想するまでに世間的な意識が定着してきたものと考えられる。このアンケートにもあるように、宝塚が表現するものは、「朗らかに 清く 正しく 美しく」をモットーに構築されたものである。つまり人間の根底に持つ正義・清らかなもの・気品のあるものへのあこがれが必ず作品の中にみられ、その作品は修練を積んだタカラジェンヌによって表現されている。

* A study on Takarazuka Revue as a Japanese cultural performance troupe and its history.

** Akiko Kato 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 (Department of Culture and Communication)
キーワード：表現 宝塚 継承 教育

そこで本稿では、宝塚歌劇がこの100年の間に、日本の文化の一つとして“表現”してきたものを、その歴史とともに考えてゆきたい。

2. 宝塚歌劇団について

2-1. 宝塚のはじまり

宝塚歌劇の歴史は、1913年7月、小林一三によって、現宝塚歌劇団の前身『宝塚歌唱隊』が設立され、これを同年12月に、『宝塚少女歌劇養成会』と改称し、1914年4月1日から5月30日までパラダイス劇場で行われた宝塚少女歌劇第一回公演『どんぶらこ』他2作品を上演したことから始まる。

箕面有馬電気軌道（現阪急電鉄宝塚本線）の経営を任された小林一三が、1911年に大阪梅田からの路線の終点宝塚駅を開通させ、モダンを売り物にした宝塚新温泉の中に日本で最初といわれるプールを開設した。乗客誘致を計ったが当時は不評であったため、このプールを改築して造った劇場（パラダイス劇場）が、現在の宝塚大劇場の礎となる施設であった。

小林一三著『宝塚漫筆』（1955年）によれば、「当時はほとんどなにもなかった宝塚の地へ、あんな無理なことをやったのは、電車を繁昌させなくてはならないから、なんとかしてお客をひっぱりようとしてやったことで、何も宝塚と言うところがいいからとやってやったわけではない。電車事業というものは都会と都会を結ぶからいいので、宝塚線のように、一方に大阪という大都会があっても、一方が山と川ではだめだから、何かやらなくてはならないというわけで、したがって宝塚は無理にこしらえ都会である。」と記してある通り、宝塚は箕面有馬電気軌道の開設に伴うことによる場客誘致の一環として誕生した。

箕面有馬電気軌道という名のように、当初は大阪から箕面までと、大阪から宝塚を通過して有馬までに鉄道を敷設する予定だった。しかし、大阪から宝塚までは出来あがったが、宝塚から有馬までの工事認可の遅れが原因で計画を変更せざるを得なくなり、温泉事業を行うことになった。当時の宝塚という土地は阪神の間の奥座敷として、武庫川沿いの温泉街が有名であったため、地元の温泉業者にとっては宝塚での温泉事業は商売敵の参入で賛成できず、元湯の使用権を許可してもらえなかった。そこで武庫川東岸にある現在の宝塚大劇場や元ファミリーランドがある場所に宝塚新温泉を作ることになった。その新温泉は、従来の古い湯治場ではなく大理石の近代的なものを作った。特に、女性を意識した造りで、当時には珍しく婦人化粧室、婦人休憩室などを備えた。さらに、温泉だけでは対岸の温泉施設に対抗できないので、併設のパラダイス・ホールに日本初の屋内プールを作ることにした。だが、当時の時代背景では、男女が共に泳ぐことに抵抗があったことや、水温調節の装置がなく水温が低すぎたことなどが原因で利用客は極めて少なく、2年ほどでこの施設は閉鎖した。その後、そのプールの水を抜き、水槽の全面に床を設けて客席に、脱衣場を舞台に、舞台下を楽屋に、二階見物席を栈敷に改造した。正面平土間は座り席、二階栈敷は腰掛け席とし、観客収容5百人だった。そこで、1914年の4月に、満10歳～14歳の少女16名による宝塚少女歌劇の公演が始まり、二カ月間大入り満員の公演となった。これが宝塚歌劇団のはじまりである。

このはじまりについて、『宝塚漫筆』に、「その頃、大阪の三越呉服店には、少年合唱隊なる

ものがあつた。二、三十人の可愛らしい楽士が養成され、赤地格子縞の洋装に鳥の羽根のついた帽子を斜めにかぶって、ちょっとチャアミングないでたちで、各所の余興にサービスをして好評であつた。宝塚新温泉もこれをまねて、三越の指導を受け、女子音楽隊を設けることにした。十五、六名の少女を募集し、唱歌をうたわせようという宝塚唱歌隊なるものを組織することになったのである」と記している。

また、小林一三『逸翁自叙伝——青春そして阪急を語る』（阪急電鉄、1979年、218頁）にも、この「少女歌劇という変則の宝塚専売の新興芸術の発想は、すでに評判の高かつた東京、大阪の三越少年音楽隊をはじめ、主な百貨店の少年音楽隊をヒントにした」と書かれている。そして、少年音楽隊よりも、楽器使用は少なく歌うことを主にするため、より経費の安い少女唱歌隊であれば宣伝価値も満点であるということも要因にあつた。当時の箕面有馬電気軌道は財政的にも最も苦しい時代で、その後、せつかく認可が下りた宝塚—有馬観の軌道敷設権すらも放棄せざるをえなかつたほどだつたのだ。

津金澤聰廣『近代日本の音楽文化とタカラヅカ』（2006年）によれば、その頃、小林が見物したオペラからも学生時代から寄稿家として活躍していたことで招かれた宴の席でも、少女歌劇を創設するヒントを得ていた。宴の席で出会つたバイオリン弾きの少年が日本のメロディで、節を面白く歌うことや、壮士芝居で西洋婦人に扮した俳優が俗謡を歌う場面が強く印象に残り、これらの体験から旧劇の歌舞伎にかわるべき歌劇の日本化、宝塚少女歌劇への発想となつて具体化されていった。

当時は画期的だつた新聞やテレビなどのマスメディアを借りて宝塚をPRすることを発案した小林の功績により、温泉地の余興として始めた公演の観客数は、その後も伸びていった。1914年・19万人、15年・26万人、16年・35万人、17年・36万人、18年・43万人と増え続け、プールを改装したパラダイス劇場では手狭になつた。そのため、その3年前に廃園になつた箕面動物園の中にある公会堂を宝塚に移築して、1919年にパラダイス劇場の約三倍の規模の歌劇新劇場でも公演が開始された。この時から「花組」「月組」が誕生し2組で交互に公演するようになった。その後、1924年にこの二つの劇場が火災したことで、4000人収容の大劇場を新設することになつたことをきっかけに3組目の「雪組」が誕生した。

また、1913年12月に改称された「宝塚少女歌劇養成会」は、1919年「宝塚音楽歌劇学校」として養成を目的として、文部省より認可を受けた。初代の校長には小林一三が就任した。

こうして、現在まで続く「宝塚音楽学校」と、「宝塚歌劇団」が数組に分かれて興業するようになった現在の公演形式の基礎が築かれたのである。

2-2. 公演システム

3組の創設に続き、1933年に「星組」、1998年に「宙組」が創られ、現在、宝塚歌劇団の構成は、花・月・雪・星・宙の5つの組から成り立っている。現在の公演システムは、本公演を各組が5～6週間ずつ上演し、5組により年に10回の公演をすることで、年間を通じて常に公演が行われる。主に本拠地である兵庫県の宝塚市にある宝塚大劇場と、東京日比谷にある東京宝塚劇場の2か所で本公演が行われ、その他にも、各地方を回る地方公演やバウホール（宝塚小劇場）公演・日本青年館公演（東京）や、中日劇場（名古屋）、博多座（福岡）、梅田芸術劇場

(梅田) など主要都市でも定期的に公演を行っている。

数にして、本公演だけでも1年間に通算1000回以上も上演している。これらは一公演ごとに芝居とレビューあるいはショーという二部構成(2本立てという)の形式をとっている。物語の内容により、2幕を通して芝居をすることもあるが芝居だけの1本のものであっても最後に10分程度の短いショーや、宝塚歌劇独特の大階段を下りるフィナーレが付け加えられているのも大きな特徴である。

現在、宝塚歌劇は通年公演を実施している。太平洋戦争で歌劇団が縮小されることになり、一度閉じることになった星組が1948年に再び開設されて以降、兵庫県の宝塚大劇場は通年で6回上演されていたが、東京宝塚劇場は1934年～1997年までは通年公演を行っていなかった。年に2か月づつ5回公演つまり10か月間は上演されており、あとの2か月は東宝系の普通の公演に舞台を貸していた。そのため、いつも兵庫県の宝塚大劇場でしか見られない公演が1公演のみできてしまうため、ファンが全公演を東京でも見たいという要望が多数寄せられたことと、東京宝塚劇場が老朽化したことで、立て直しに入った1998年ころから兵庫と同様に東京でも通年公演が可能となった。(1998年～2000年の東京公演は、TAKARAZUKA 1000days劇場を使用。)

2-3. 作品について

2-3-1). 初期の作品

宝塚歌劇では、初演から2012年までの間に2,847作品を上演している【図表1】。

宝塚少女歌劇第一回公演は、北村季晴作歌劇『ドンブラコ』と、本居長世作の喜歌劇『浮れ^{うかれ}

図表1

	パラダイス 劇場	公会堂 劇場	宝塚 小劇場	宝塚 中劇場	(旧)宝塚 大劇場	宝塚映画劇 場(改め宝 塚小劇場)	宝塚新 芸劇場	(新)宝塚 大劇場	パウ ホール	備考
2004					*			16	6	90周年
2005					*			15	6	
2006					*			16	11	
2007								16	12	
2008								16	11	
2009								20	7	
2010								20	8	
2011								20	8	
2012								20	8	※上映 中・予定 含む(大 劇場4、 パウ1)
	81	98	8	468	1,539	18	15	304	316	2,847

再演含む

1912年から2003年までのデータは、「十文字国文」第15号(平成21年3月) <授業報告>授業実践『宝塚研究』を参考にされたい。

だるま達磨』と、ダンス『胡蝶の夢』の3本が、「婚礼博覧会」の余興として催され、各15分程度の作品であった。その後、この第一回公演の成功により、約30分の短編のお芝居や合唱、日本舞踊、ダンスなどを組み合わせて、一日に3～5本立ての公演を行っていた。当時の内容は、お伽話・神話・翻訳童話・オペラ・オペレッタ等の創作歌劇が多かった。現在の宝塚歌劇の公演は、舞台と銀橋との間にオーケストラボックスが設けられ、常に生演奏で伴奏されているが、1912年の創立当初から西洋音楽の伴奏が導入され、初期のオーケストラの伴奏は、音楽教師高木和夫のピアノと生徒のバイオリンなどで行われていた。

その他、宝塚は新しいことを常に取り入れるのも特徴である。フランスで当時流行していたシャンソンを宝塚歌劇が日本で初めてのレビューとして『モン・パリ』で、紹介したのは、1927年のことであった。この作品は、舞台の大好評にとどまらず、歌劇団の演出家岸田辰彌が作曲家の高木和夫に編曲させ、新しい歌詞を付けて発表した主題歌『モン・パリ』として、コロムビアレコードから発売され、ラジオからの放送により日本中の大ヒットとなった。

また、創設当初は、歌劇の作家のひとりとして小林一三もたくさんの作品を残している。逸翁伝によれば、「私はその昔の文学青年であったお陰で、中学校や師範学校の音楽教科書をいろいろと集めて面白い歌だけを選別して、録と糊さえあれば、楽譜を継ぎ足して一幕くらい仕上げる芸があるから、私は一夜にして『紅葉狩』や『村雨松風』の拙作をならべ得たのである。」と記している通り、脚本や演出も手がけた。

以下、小林一三作品（1919年以降はペンネーム池田畑雄を使用）である。

1914年『紅葉狩』 1915年『兎の春』『雛祭』『御田植』『日本武尊』 1916年『竹取物語』『村雨松風』『夕陽ヶ丘』『ダマスクスの三人娘』 1917年『案山子』『桃色鸚』『大江山』『リザール博士』『夜の巷』 1918年『厩戸王子』『一寸法師』『クレオパトラ』『江戸の島物語』『青葉の笛』『出征軍』 1919年『囃替』『風流延年舞』 1922年『白虎隊』『丹波興作』 1923年『室咲』 1924年『政岡の局』

2-3-2). 作品分類

2004年に迎えた90周年までの作品の軌跡は、宝塚歌劇団をはじめ、さまざまな研究者によって先行研究があり、すでに『十文字国文』第15号（2009年）でも発表している。そのため、2004年～2012年までの9年間に上演された作品のうち、本公演として上演された193作品を取り上げ、作品の種類を整理した。【図表2】（今回は調査対象の2004年以降の新作のみをカウントし、12回行われた再演は作品数にはカウントしていない。）

分類方法は、宝塚歌劇団公式HPの公演概要と舞台衣装やコスチュームなどを参考に分類した。

分類の基準は、まず、193作品すべての演目を「和もの」「洋もの」「現代もの」の3種類に分けた。さらに洋ものに関しては、舞台となった国と物語の内容や衣装などから2つに分けた。現代ものとは、スーツ姿で演じる公演を指し、年代を区切るため戦前と戦後とした。また、戦中の作品2作品は戦前とした。その他、特に時代設定がされていないものに関しては、舞台衣装を参考に分類し現代物とした。コスチューム物でない洋物は時代設定で分け、時代設定が不明で内容が現代のものは戦後に分類した。

2-3-3). 分類結果

上記のとおり、193作品を4種類6項目に分類した。【図表3】

図表2 宝塚歌劇における 90周年以降の作品数の内訳

	和物	コスチューム物		現代物		海外 ミュージカル	年間作品 数合計	※作品数
		アジア・アフリカ	欧米・ロシア	戦前	戦後・未来・未設定			
2004	5	2	4	4	5	1	21	22
2005	3	2	6	2	5	2	20	21
2006	5	—	6	3	10	1	25	27
2007	3	1	6	5	5	1	21	28
2008	2	1	7	5	5	3	23	27
2009	3	1	6	3	7	—	20	27
2010	1	1	7	4	8	1	22	28
2011	1	1	8	3	8	1	22	28
2012	2	—	7	6	3	1	19	28
90周年以 降の公演 合計数	25	9	57	35	56	11	193	
全体に対 する割合 (構成比)	13.0%	4.7%	29.5%	18.1%	29.0%	5.7%	100.0%	

※再演作品は、初演が2004年以前のものであればカウント。2004年以降は初回のみカウント。

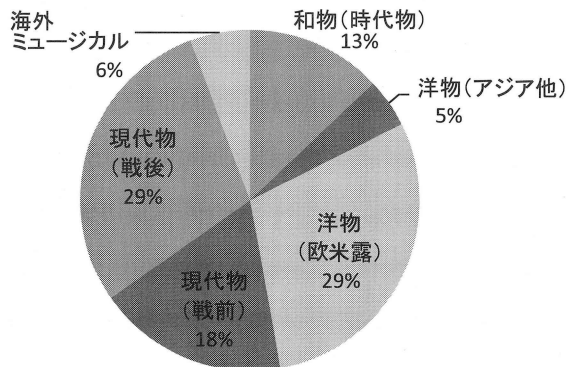
※基本的には、和物・コスチューム・現代・海外で分類。判断材料は、主に公式HPの公演概要と舞台衣装。

※コスチューム物でない洋物は、時代設定で分類。設定がなく、内容が現代のものは、戦後に分類。

※戦後とは、第二次大戦を設定。1945年。

図表3

	分類名	作品数
①	和物(時代物)	25
②	洋物(アジア他)	9
③	洋物(欧米露)	57
④	現代物(戦前)	35
⑤	現代物(戦後)	56
⑥	海外ミュージカル	11



2-3-4). 分析結果

宝塚歌劇の一般的なイメージは、おそらく西洋のコスチュームもののイメージが強いと思われる。しかし実際には、過去9年間の全作品193作品の割合をみると、全公演のなかで洋物は3割にも満たない。それは、1973年『ベルサイユのばら』ブームやウィーンミュージカル『エリザベート』も影響して宝塚といえば、「洋もの」のイメージが多くなってしまっていることも考えられる。しかし、実際は、「現代もの」も「洋もの」とほぼ同じ割合で公演されている。

もとより宝塚歌劇の公演は、男役の格好良さを強調するために背広などの衣装や立ち振る舞いを活かす工夫がされており、洋もの、現代ものの人気は定評がある。しかし、昨今の演劇界では、日本物の上演が少なくなっている中で、「日本の伝統的なものは、必ず残すように」という小林一三の遺志を踏まえ、現在も年間に1度以上必ず上演されている。それだけ宝塚の作品は、伝統を重んじ、かつ内容がバラエティに富む舞台を創造していることを現している。

2-4. 演出家について

宝塚歌劇団の演出家は、同時に作家も兼ねている。そのため、プログラムなどの作品紹介には必ず「作・演出(名前)」となっている。ただし、海外ミュージカルを上演する場合は、日本人の嗜好に合わせたり、主役となる男役のスターを中心に魅力的に見せたりするための宝塚らしいアレンジをすることもあり、「潤色・演出」という形で台本や音楽も書き替えている場合もある。基本的には、これら演出家スタッフにより、演出・演出助手・舞台監督まで行っている。

また、宝塚歌劇団には専属の演出家が大勢在籍しているのも特徴で、さらにそれらの演出家たちが後輩を育てている。現在も現役の演出家として活躍する植田紳爾や岡田敬二は、白井鐵造から“宝塚のレビュー”を直接学び、その岡田敬二が小池修一郎を育てるといって、宝塚作品を支える演出家が、次世代を繋いでいることがうかがえる。そして、こんにちも、年間数十作品という膨大な作品を上演し、それを生み出す専属の演出家は25名に及ぶ。以下、現在、宝塚歌劇団に在籍する演出家である。(五十音順 敬称略。)【図表4】

石田昌也、生田大和、稲葉太地、上田久美子、植田景子、植田紳爾、大野拓史、岡田敬二、木村信司、草野旦、小池修一郎、児玉明子、小柳奈穂子、齋藤吉正、酒井澄夫、柴田侑宏、鈴木圭、田淵大輔、谷正純、中村暁、中村一徳、原田諒、藤井大介、正塚晴彦、三木章雄。

宝塚歌劇では演出家のみならず、音楽家、照明、衣装などのすべてのスタッフが、採用された後にまずは助手となり、宝塚のなんたるかを学ぶ長い期間を経て、歌劇団の専属となり一人前とされる。音楽にしても、宝塚にはオーケストラもあれば、作曲家のスタッフもいる。そして宝塚には宝塚独特の音楽スタイルがある。振付家や照明も同様。衣装部も、宝塚の舞台で映えるような工夫をしながら、デザイン・縫製・お直しを担当するそれぞれが、技術を若いスタッフに継承していく。しかし、時代の流れとともに、従弟制度は徐々に薄れているという。それでも宝塚には「清く 正しく 美しく」というモットーがあり、品格を保つという魂がある。気品のある舞台を作り、宝塚に夢を見に来るファンを大切にする精神は受け継がれているのだ。

宝塚音楽学校はしつけが厳しいため、かつては花嫁修業のために通う者がいたほど、女子教育を徹底した。歌劇団の生徒は芸事に限らず、お行儀の良い女性としての教育を受け、劇団の

図表4 宝塚歌劇の演出家と作品名(1998年~2006年)

作家・演出家

谷正純	春櫻賦;1998、SPEAKEASY(スピークイージー)一風の街(シカゴ)の純情な悪党たち(脚本演出);1998、我が愛は山の彼方に一伊藤桂一作「落日の悲歌」より(演出);1999、パッカスと呼ばれた男;1999、望郷は海を越えて;2000、ベルサイユのばら 2001一フェルゼンとマリー一アントワネット編(演出);2001、ミケランジェロー神になろうとした男一;2001、ベルサイユのばら 2001一オスカルとアンドレ編(演出);2001、プラハの春(脚本演出);2002、野風の笛(脚本演出);2003、1914/愛;2004、JAZZYな妖精たち;2005、ベルサイユのばら一フェルゼンとマリー一アントワネット編(演出);2006、ベルサイユのばら一オスカル編(演出);2006、	
草野旦	源氏物語 あさきゆめみし一原作:大和和紀「あさきゆめみし」(講談社「KC mimi」刊)一(脚本演出);2000、	LET'S JAZZ一踊る五線譜一;1998、ヘミングウェイ・レヴュー;1998、ノバ・ボサ・ノバ一盗まれたカルナバル(構成演出);1999、夢は世界を駆けめぐる一THE WORLD HERITAGE 2001一;2001、サザンクロス・レヴューII;2001 ※東京のみ、ON THE 5th一ヴィレッチからハーレムまで一(作演出);2002、レヴュー誕生一夢を創る仲間たち一(作演出);2003、タカラヅカ絢爛(けんらん)一灼熱のカリビアン・ナイト一;2004、タカラヅカ絢爛(けんらん)II一灼熱のカリビアン・ナイト一;2004、レヴュー伝説一モン・パリー誕生77周年を記念して一;2005、ザ・クラシック一I LOVE CHOPIN一;2006、
小池修一郎	エクスカリバー一美しき騎士たち一;1998、エリザベート一愛と死の輪舞(ロンド)一(潤色演出);1998、タンゴ・アルゼンチーノ;1999、LUNA一月の伝言一;2000、カステル・ミラージュ一消えない蜃気楼一;2001、エリザベート一愛と死の輪舞(ロンド)一(潤色演出);2002、薔薇の封印一ヴァンパイア・レクイエム一;2003、エリザベート一愛と死の輪舞(ロンド)一(潤色演出);2005、NEVER SAY GOODBYE一ある愛の軌跡一;2006、	
岡田敬二		シトラスの風;1998、ザ・レヴュー '99;1999、Asian Sunrise;2000、Rose Garden;2001、With a Song in my Heart一君が歌、わが心に深く一;2002、テンプレーション!一誘惑一;2003、タカラヅカ・グロリー! (作演出);2004、ASIAN WINDS!一アジアの風一;2005、ネオ・ダンディズム!一男の美学一;2006、
石田昌也	皇帝(演出);1998、再会;1999、猛(たけ)き黄金の国一士魂商才!岩崎彌太郎の青春一(脚本演出);2001、長い春の果てに(脚本演出);2002、傭兵ビエール一ジャンヌ・ダルクの恋人一(脚本演出);2003、青い鳥を捜して;2004、維新回天・竜馬伝!一硬派・坂本竜馬III一;2006、	スナイパー一恋の狙撃者一;1998、ミレニウム・チャレンジ一;2000、ワンダーランド;2005、
植田紳爾	皇帝(作演出);1998、夜明けの序曲(作監修);1999、我が愛は山の彼方に一伊藤桂一作「落日の悲歌」より(脚本監修);1999、ベルサイユのばら 2001一フェルゼンとマリー一アントワネット編(脚本演出);2001、ベルサイユのばら 2001一オスカルとアンドレ編(脚本演出);2001、春麗の淡き光に一朱天童子異聞一;2003、天使の季節(作演出);2004、長崎しぐれ坂一榎本滋民作「江戸無宿」より(脚色演出);2005、ベルサイユのばら一フェルゼンとマリー一アントワネット編(脚本演出);2006、ベルサイユのばら一オスカル編(脚本演出);2006、	いますみれ花咲く;2001 ※東京のみ、飛翔無限;2004、
酒井澄夫	浅茅が宿一秋成幻想一;1998、夜明けの序曲(共・演出);1999、砂漠の黒薔薇;2000、愛燃える一呉王夫妻一;2001、ガイズ&ドールズ(脚色演出);2002、花舞う長安一玄宗と楊貴妃一井上靖「楊貴妃伝」より(脚本演出);2004、	華麗なる千拍子一高木史朗作品より(監修);1999、ESP!!(構成演出);2001、花の宝塚風土記(ふどき)一春の踊り一;2003、エンター・ザ・レヴュー;2005、レ・ビジュ一ブリアン一きらめく宝石の詩一;2006、
中村一徳	エリザベート一愛と死の輪舞(ロンド)一(演出);2002、天使の季節(演出);2004、ファントム(潤色演出);2004、ファントム(潤色演出);2006、	ラヴィール;1998、華麗なる千拍子一高木史朗作品より(構成演出);1999、ザ・ビューティーズ!;2000、ダンシング・スピリット!;2001、LUCKY STAR!;2002、REVUE OF DREAMS;2005、
柴田侑宏	黒い瞳一ブーシキン作「大尉の娘」より(脚本);1998、激情一ホセとカルメン一(脚本);1999、凱旋門一エリッヒ・マリア・レマルクの小説による一(脚本);2000、花の葉平(なりひら)一忍の乱れ一(作);2001、大海賊一復讐のカリブ海一(監修);2001、琥珀色の雨にぬれて(作演出);2002、ガラスの風景(作);2002、白昼の稲妻(作);2003、飛鳥夕映え一蘇我入鹿一(作);2004、霧のミラノ(作);2005、	
三木章雄	夜明けの序曲(共・演出);1999、ガイズ&ドールズ(演出);2002、	ル・ボレロ・ルージュ;1998、グレート・センチュリー一メモリーズ&メロディーズ一;1999、美麗猫一ミラキヤット一;2000、Jazz Mania一ジャズマニア一;2000、VIVA!;2001、ジャズマニア;2001 ※東京のみ、ザ・ショー・ストップ一;2002、レ・コラージュ一音のアラバスター一;2003、アプローズ一タカラヅカ!一ゴールデン90(ナインティ)一(共・作演出);2004、タカラヅカ・ドリーム・キングダム(共・演出);2004、ネオ・ヴォヤージュ;2005、
中村暁	黄金のファラオ;2000、大海賊一復讐のカリブ海一(作演出);2001、霧のミラノ(演出);2005、	

正塚晴彦	琥珀色の雨にぬれて (演出); 2002、追憶のバルセロナ; 2002、Romance de Paris; 2003、La Esperanza—いつか叶う—; 2004、ホテル ステラマリス; 2005、愛するには短すぎる (脚本演出); 2006、	デパートメント・ストア; 2000、
木村信司	ゼンダ城の虜 (脚本演出); 2000、愛のソナターリヒェルト・シュトラウス/ワーグナー・フォン・ホフマンスタール作: オペラ「ばらの騎士」より— (脚本演出); 2001、風風伝—カラフトとウーランド— (脚本演出); 2002、王家に捧ぐ歌 オペラ「アイダ」より; 2003、スサノオ—創国 (そうこく) の魁 (さきがけ)—; 2004、炎にくちづけを—「イル・トロヴァーレ」より—; 2005、暁 (あかつき) のローマー「ジュリアス・シーザー」より—; 2006、	ESP!!! (演出); 2001、
荻田浩一	螺旋 (らせん) のオルフェ; 1999、白昼の稲妻 (演出); 2003、マラケシュ・紅の墓標; 2005、	パッサージュー硝子の空の記憶—; 2001、バビロン—浮遊する摩天楼—; 2002、ロマンチカ宝塚'04—ドルチェ・ヴィータ!—; 2004、タランテラ!; 2006、
藤井大介		GLORIOUS!!!—栄光の瞬間 (とき)—; 2000、Cocktail—カクテル—; 2002、Joyful!!!; 2003、アブローズ・タカラヅカ!—ゴールデン90 (ナインティ)— (共・作演出); 2004、TAKARAZUKA舞夢 (マイム)!; 2004、タカラヅカ・ドリーム・キングダム (共・演出); 2004、ソウル・オブ・シバ!!!—夢のシューズを履いた舞神—; 2005、
齋藤吉正		BLUE・MOON・BLUE—月明かりの赤い花—; 2000、満天星大夜總會—THE STAR DUST PARTY—; 2003、アブローズ・タカラヅカ!—ゴールデン90 (ナインティ)— (共・作演出); 2004、タカラヅカ・ドリーム・キングダム (共・演出); 2004、
植田景子	～夢と孤独の果てに～ルードヴィヒ I I 世; 2000、シニョールドン・ファン; 2003、落陽のパレルモ; 2005、墮天使の涙; 2006、	
大野拓史	飛鳥夕映え—蘇我入鹿— (演出); 2004、	
児玉明子	エンドレス・ラブ、冬物語、月夜歌聲、聖なる星の奇蹟、『シークレット・ハンター』—この世で、俺に盗めぬものはない— (2007年3月)	
小柳奈穂子	「SLAP STICK」、「アメリカン・バイ」	
鈴木圭	里見八犬伝	
加藤誠	新人公演担当	
稲葉太地	「おーい春風さん」	
川上正和	春ふたたび、おーい春風さん	

構成員になる。入団して数年はラインダンスに参加し、「新人公演」で舞台経験を積む。新人公演とは、入団7年目までの生徒で構成され、本公演の中でたった1日だけ同じ演目を若手だけで舞台を体験するチャンスを与えられる場である。それは同時に演出家も新人公演を担当する若手演出家の育成の場にもなっている。また、その生徒の中から限られたスターを育て、そして各組の中に常にトップスターが存在する。トップスターの他にも、2番手、3番手、4番手という次にトップスターとなる人材が常に控えて、トップスターに次ぐ活躍をしたり、本公演以外の劇場で主役を演じたりしながらトップスターとなる教育を受ける。トップスターになると一番美しい時期に活躍し、絶頂期で次世代のスターへとたすきをつなぐ。どちらかという舞台では、スターばかりが目立ちはちであるが、その裏で華麗なスターを丸とって育てる演出家・音楽家・装置・照明・音響・大道具など、劇団専属のスタッフがいるからこそ、「華やか」で「豪華」でそして「スピード感のある」宝塚歌劇の舞台が可能となる。多くの生徒たちはいずれ退団の時期が来る。しかし、劇団所属の演出家をはじめとするスタッフは在籍し続けることにより、伝統を継承していくという重要な仕事を担っている。歌舞伎にも座付の作者制度はあるが、宝塚ほど徹底して育成するシステムにはなっておらず、これらも宝塚歌劇独特の養成システムである。そこにも100年もの間、廃れることなく公演を続けることができた要因があろう。

3. 考察

宝塚歌劇は、日本の伝統芸能である歌舞伎・能・狂言などと比べられるが、社会的地位ではそこまで高いと評価されることはないだろう。これは小林一三の意思を継いで、「大衆演劇」として位置づけられていることもその要因といえよう。1924年に東洋一の4千人を収容できる劇場を建設した際も、小林は「安くてもいいものを多くの人々に」とし、宝塚が家族揃って愉しむ娯楽であるために低料金でなければならないとの理念を貫いた。福沢諭吉から学んだ奉仕の精神であり小林の経営哲学であり、娯楽が一部の特権階級のものであっては発展も成長もないというのが終生の持論であった。

1914年の不況下に創設された宝塚歌劇は2013年は99周年にあたる。その約百年の間には、日本は戦争ですべてを失ってから復興し好景気を迎えた。宝塚劇場も、大火災、戦争、阪神大震災と様々な被害を受けて来ている。そして現在、また日本は大不況の最中にある。特に2009年のリーマンショックを背景に、宝塚歌劇の客席にもちらほら空席が出る日はあるものの、それでも、1970年代後半からのベルばらブーム以来、東京宝塚劇場はいまだにほぼ満員である。

阪急グループの土台を築いた小林一三没後55年が経つ。つまり、宝塚歌劇100年の歴史の中で小林が関わるることができたのは、その歴史の半分に満たない40数年である。それにも関わらず、小林の意思を継ぎ、宝塚歌劇は繁栄し続けてきた。その要因を考えてわかるのは、2-3. でわかるように多くの新しい作品を生み出し、常に時代背景に合わせて新しいことを取り入れるチャレンジ精神を失わずに進歩していることにある。また、その進歩を支えているのは、宝塚歌劇団が、「生徒」を育て、「演出家」を育て、2-4. でわかるようにそこから作り上げる「作品」を次々と世に送り出している姿勢ではないだろうか。

創設当初は、御伽歌劇から始まった公演ではあったが、演出家岸田辰彌がヨーロッパ研修で得た知識でパリの風を吹き込んだ画期的な作品により公演を成功へと導いた。その後も、岸田に続き、白井鐵造が海外視察から戻って作った『パリゼット』（1930年）で宝塚の公演は“レビューの宝塚”として大きく変貌し定着していった。白井は、その後40年以上、宝塚内外に沢山の作品を残した。白井の後にも、菊田一夫、鴨川清作、宇津秀男、高木史朗、柴田侑宏、植田紳爾、内海重典、横沢英雄など、昭和の宝塚を支えた立派な演出家のもと、沢山の作品が残された。その他にも、長谷川一夫や尾上松緑など有名な俳優や歌舞伎役者たちが演出に加わるなど、常に新しい風を取り入れながら前進してきた。現在でもこの海外研修制度は続けられ、歌劇団に在籍する演出家は、1年ほどの海外研修に出る制度がある。

それらが作品の厚みとなり、女子教育のゆきとどいた生徒たちによって演じられるその舞台は、ほかの舞台にはない日本女性の清楚な美しさを現し、昨今のメディアで取り上げられる一過性の人気アイドル的な若者たちとは違う上品さを醸し出せるのだろう。いつの時代にも不変であり、失われない気品に安心観を与えてこそ宝塚の良さが際立つことも挙げられる。現代社会の環境、生活様式では、保ち続けることは困難かもしれないが、宝塚歌劇団と宝塚音楽学校が、歌劇団の生徒やスタッフに愛情を持って“人を教育する”という姿勢を失わない限り、繁栄しつづけるのだろうということが容易に想像できる。人を育て、作品を育てる層の厚さと、次世代に継承することの大切な道筋を壊さず、スターも作品も常に旬であり続ける体制こそ、

宝塚の縮図であり、今日の社会で日本全体に失われつつある大切な精神だと考える。

小林から直接指導を受け、2012年まで80年以上も終生現役の生徒として在籍した春日野八千代も、宝塚の精神とは「品格 舞台での行儀の良さ 謙虚さ」であるとし、それを守り次世代につなげた。

小林一三の掲げた理想や伝統を引き継ぎ、現代に失われつつあるものを表現すること、普遍的なものを表現している舞台を創造するからこそ、愛され続けた経歴がある。そして今後も歌舞伎や日本の伝統芸能と同じく、品の良い大衆芸能として常に人を育てながら100周年を超えていくのであろう。

参考文献

- 『宝塚歌劇の変容と日本近代』 渡辺裕 1999年 新書館
- 『宝塚 百年の夢』 植田紳爾 2002年 文芸春秋
- 『ファンとブームの社会心理学』 松井豊編 1994年 サイエンス社
- 『宝塚歌劇団スタディーズ』 江藤茂博編 2007 戎光祥出版
- 『近代日本の音楽文化とタカラヅカ』 近藤久美 津金澤聰廣 2006年 世界思想社
- 『宝塚戦略』 津金澤聰廣 1991年 講談社
- 『「花の道」抄』 小林公平 1984 講談社
- 『宝塚というユートピア』 川崎賢子 2005 岩波新書
- 『宝塚イズム16』 藪下哲司・鶴岡英理子編 2011 青弓社
- 『宝塚歌劇の70年』 1984年 宝塚歌劇団
- 『夢を描いて華やかに』 1994年 宝塚歌劇団
- 『すみれ花歳月を重ねて』 2004年 宝塚歌劇団